

ち待ちて礼む。椅の彼の方に到れば黄金の宮有り。其の宮に王有り。椅の本に三の衢有り。一の道は広く平なり。一の道は草小し生ゆ。一の道は藪を以ちて塞る。蝦夷を其の衢に立てて、一人宮に入りて曰さく「召せり」とまうす。王見て言はく「此れ法花経を写し奉りし人なり」とのたまひて、すなはち草小し生えたる道を示して言はく「此の道より将よ」とのたまふ。四人副ひて熱き鉄の柱の所に至り、彼の柱を抱かしめ、編みたる鉄を熱く焼きて、背に著けて押し、三日夜を歴。銅の柱を抱かしめ、編みたる銅をはなはだ熱くし、背に著けて押し、また三日を選。極りて熱きこと燭の如し。鉄と銅と熱しといへども、熱きにあらざらず。編みたる鉄重しといへども、重きにあらざらず。輕きにあらざらず。惡しき業に引かれ、ただし抱き荷はむと欲ふ。合せて六日を歴てすなはち出づ。三の僧蝦夷に問ひて言はく「汝此の意を知るやいなや」といふ。答へていはく「知らず」といふ。僧また問ひて言はく「汝何の善をか作ふ」といふ。答へていはく「我れ法華経三部を写し奉る。ただし一部ののみまだ供養せず」といふ。札を三枚出す。二枚は金の札にして一枚は鉄の札なり。また斤を二枚出す。一枚は重くして稲一把を倍し、一枚は軽くして稲一把を減す。時に僧言はく「札を校ふれば、実に汝が白す如くなり。三部の法花大乘を敬写

すなり。大乘を写すといへども、重き罪を作る。所以は何に。汝斤二を用て、出挙の時には輕き斤を用、價を徴る日には重き斤を用。故に汝を召す。今に忽に還れ」といふ。還來ること前の如し。多の人等を以ちて道を掃き、椅を作りて言はく「法花経を写し奉りし人閻羅王宮より還來るなり」といふ。彼の椅を度り畢り、纔見れば甦還る」といふ。然うして彼の写せる経を戴ひて、ますます信ふ心を發し、講読みて供養す。誠に知る、善を作れば福來り、惡を作れば災來る、善と惡との報終に朽ち失せず、並に二の報を受く、ただし專善を作へ、惡を作ふべからず、と。

寺の物を用また大般若を写さむとして願を建てて現に
善と惡との報を得る縁 第二十三

大伴連忍勝は、信農国小県郡嬢里の人なり。大伴連等心を同じくして、其の里の中に堂を作り氏の寺とす。忍勝大般若経を写さむが為に、願を發し物を集め、鬢髪を剃除り袈裟を著、戒を受けて道を修ひ、常に彼の堂に住む。宝龜五年甲寅の春三月に、條に人の讒を被りて堂の檀越に打ち損はれて死

一 冥界の王の居処。「金宮（上巻三十縁）」「樓閣宮（中巻五縁）」「重樓閣（下巻九縁）など」と類似する。
二 本説話にみえる王には名がつけられていない。閻羅王と解すべきではない。下文にみえる「從閻羅王宮還來亡の閻羅王宮」は、中巻七縁における「閻羅王」より推せば、閻羅という名の冥界の王宮、と解する余地があろう。
三 冥界の岐路が叙述される例に、法苑珠林・六度篇・精進部・感應緣所引冥祥記・僧規・三岐路、同・六度篇・懺悔部・感應緣所引冥祥記・慧達、太子瑞應本起經・上・三・道之衢「などがある。いずれも武人が登場し、進むべき道を指示している。

四 中巻七縁。

五 網状にしてあるのであろう。雜藏經に「熱鉄籠」とみえるものと同一か。

六 原文「合歴六日乃出」。上文の「死経七日」と合わせて考えるならば、最後の一日で蘇生、ということになる。

七 本説話においても下巻二十三縁においても、この三人の僧は「汝作何善」という問いを發している。仏教的な善行の有無によつて死者を裁く者であるが、この冥界の主宰者ともみえない。

八 僧が裁きの資料として札や斤をもち出したのであろう。生前の所業の記録にもとづいて死後審判がおこなわれる、として、辻英子、オデューセミア、ヨハネの黙示録、コーランの伝承との類似を指摘する。しかし、本説話および下巻二十三縁にみえる札は、そこに文字が記されたものではなく、より抽象的に所業の善惡を示すものとなっている。法華經・九法營には、閻羅王庁の裁きの場に「罪福札」が記される。

九 菩薩内戒經の四十七戒に二十八者、菩薩不得持重称「侵人」、二十九者、菩薩不得持輕称「欺人」とみえ、雜藏經に「汝前世時、作市令、常以輕称小斗、而与、重称大斗而取、常自欲得大利於己、侵剋余人」とみえるように、二種のはかりを使いわけるのは仏教においても惡とされた。

一〇 原文「所以者何」。仏典語。たとえば妙法蓮華經・方便品にみえる。

一 展開が唐突である。

二 帰途は同じ経路を逆に進んでいる。

三 「纔」は、一すると同時に、の意。

第二十三縁 善業と惡業についての現報説話
今昔物語集・十四ノ三十に書承。

一四 大般若波羅蜜多經。六百卷。

一五 未詳。本説話以外に所伝をみない。

一六 長野県小県郡、上田市あたり。

一七 大伴連一族の尊崇し祈願する寺。

一八 七七四年。

一九 施主。堂の維持のために経済的に力をつくす人。氏寺であるから大伴連一族が檀越である。

ぬ檀越はすなはち忍勝の同属なり。眷属議りて曰はく「殺人の罪を断らしめよ。故に輒く焼き失はず」といひて、地を点めて冢を作り殯り収めて置く。死にて五日を歴てすなはち甦り、親属に語りて言はく「召す使五人、共に副ひて疾く往く。往く道の頭にはなほ峻しき坂有り。坂の上に登りて躊躇ひて見れば、三の大なる道有り。一の道は平にして広し。一の道は草生えて荒る。一の道は藪を以ちて塞る。衢の中に王有り。使白して言さく「召せり」とまうす。王平なる道を示して言はく「是の道より将よ」とのたまふ。王の使衛み往く。道の末に大なる釜有り。釜の湯気焰の如く、涌沸くこと波の如く、吼鳴ゆること雷の如し。すなはち忍勝を取りて、井と彼の釜に投る。釜冷えて破裂れて四の破と成る。爰に三の僧出で来り、忍勝を問ひて言はく「汝何の善をか作ふ」といふ。答へていはく「我れ善を作はず。ただし大般若経六百巻を写さむと欲ひき。故にまづ願を發していまだ書き写さず」といふ。時に、三の鉄の札を出して、校ふれば白すが如し。僧告げて言はく「汝美に願を發し出家し道を修ふ。是の善有りといへども住める堂の物を多用る。故に汝の身を摧くなり。今還りて願ふことを畢へ、後に堂の物を償へ」といふ。纒放たれて還来り、三の大なる衢を過ぎて坂より下りてすなはち見れば、甦返る」といふ。

斯れすなはち願を發したる力なり。物を用し災は、是れ我が招ける罪なり。地獄の咎にあらず。大般若経に云はく「おほよそ錢一文を二十日に至りて倍さば、一百七十四万三貫九百六十八文に倍して在らむ。故に竊に一文の錢すら盗み用ることなかれ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

四 修行人（おこな）を妨ぐるに依りて猴（さる）の身を得る縁（よ） 第二十

近江国（一五）野州郡の部内（一六）の御上嶺に、神の社有り。名けて陀我大神（一七）と曰ふ。封六戸（一八）を依せ奉る。社の辺に堂有り。白壁天皇の御世（一九）の宝龜年中に、其の堂に居住める大安寺の僧惠勝、暫頃修行ふ時に、夢に人語りて言はく「我が為に經を読め」といふ。驚き覺めて念ひ怪ぶ。明日に小き白き猴現れ来りて言はく「此の道場に住みて、我が為に法華經（二二）を読め」といふ。僧問ひて言はく「汝は誰れぞ」といふ。猴答へて言はく「我れは東天竺（二四）の大王（二五）なりき。彼の国に修行僧（二六）有り。従者の数千（二七）なり。所以に農業怠る（二八）数千といふは、千余の数を数千と云ふなり。因りて我れ制めて言はく「従者多くあることなかれ」といひき。其の時

一殺意なく開設して人を殺したばあいは絞、刃を用いて人を殺したばあいと故意に人を殺したばあいは斬、鬪闘（二九）おぼひ疏。忍勝を殺した檀越を断罪するための証拠保存が必要なのである。ろ。二下巻二十二條。三下巻二十二條。四下巻二十二條。下巻二十二條と本説話は、同じことつゝ冥界でおこった異なるふたつの事件を説話化したもの。五本説話にみえる王には名がつけられていない。閻羅王と解すべきではない。六中国説話の世界では、冥界の岐路が叙述されるばあいでも、その岐路がどのような状態なのか、岐路のひとつに平坦な道が含まれているのかいないのか、記されはしない。七下二坂岸。岸下見有鍾湯刀劍禁毒之具。一応時悟是地獄（二）法苑珠林・祭祠篇・感應緣所引冥祥記・張心という例もあるが、道の終着地点に釜が沸きたっている、と述べられるのはめずらしい。八底本訓釈「井（井か（ツハト）」。井は、井の中に物を投げ入れたときの音をあらわす文字。九下巻二十二條。一〇下巻二十二條。一一「纒」は、一すると同時に、の意。一二原文即見。見ると同時に、の意。三この引用文は大般若波羅蜜多經にみえない。四第一日に一文、第二日に二文、第三日に四文、第四日に八文、というぐあいに毎日二倍にしてゆくならば、第二十日には五二四二八八文となる。本説話の「一百七十四万三貫九百六十八文」とは大きく相違する。記数法に少々問題があるが「一百七十四万三貫九百六十八文」は「七四三九六八文」をあらわす（一貫は「一十文」は「五二四二八八文」を三貫をひとまとまりの単位のように考えて記すならば、一七四三九六八文は

八八文となる。本説話は、これをあらわす表現を誤写したか。

第二十四縁 神が罪の報いの身である、とされ、仏の優位が示される。扶桑略記・光仁天皇条に引用。

五滋賀県野洲郡。一六三上山。

七延喜式・神名帳に、近江国野洲郡に御上神社がみえる。現在の御上神社である。本説話によれば御上神社は「陀我大神」を祭っているが、延喜式・神名帳にみえる近江国犬上郡の多何神社（現在の多賀大社）との関係は不明。神祇正宗に内裏三千番神を述べて十八日の箇所に「三山（上か）大明神」をあげ、「今ノ多賀大明神、本地ハ伊弉諾尊也」としている。

八神社を経済面から支えるための封戸。神戸、神村という。その戸より納める調、庸、田租が神社の建造や調度などにあてられた（神祇全）。新抄格勅符抄に、天平神護二年（七六六）に「田鹿神六戸」とみえる（松浦貞俊）。下文に典主の横領が述べられる。ここに「封六戸」が特記されるのはその伏線である。元七七〇一七八一年。

三未詳。本説話以外に所伝をみない。

三本書では、動物が人のことを発するばあいは、夢の中、と設定される説話（中巻十五縁、中巻二十二縁）と、設定されない説話（上巻十縁）とがある。いずれのばあいにも、その動物の発言内容の虚実が検討され、その動物の行動によつて発言内容が実であるか確認されている。本説話は、夢の中、という設定無しに動物が人のことを発しているが、惠勝はその動物の発言内容の虚実を検討することなく信じている。満腹は信じない。白猴の発言内容を信じていると信じないとの差は、夢をみたのと夢をみてい